学会創設40周年記念特別シンポジウム 6月26日(土) 13:00-16:00

工学部 I B館 大講義室

比較教育学の未来：新しい地平を拓く

司会者 江原 武一 (京都大学)
二宮 皓 (広島大学)

基調報告 I 日本比較教育学会の40年
日本比較教育学会会長 馬越 徹
(桜美林大学)

基調報告 II 比較教育学研究の新たな課題とパラダイム
世界比較教育学会事務局長 マーク・ブレイ
(香港大学)

提案者 モデルとしての先進国研究 石堂 常世 (早稲田大学)
開発研究との関わり 北村 友人 (名古屋大学)
方法としてのフィールド 大塚 豊 (広島大学)

企画趣旨

かつて60年代初頭に「若い学問」と言われていた比較教育学も学としての市民権を得て既に久しい。本学会も創設40周年を迎えるこの時点で、改めて比較教育学の来し方を振り返り、目指すべき方向を展望してみたい。

馬越徹会長による学会創設40年に関する学術的回顧および、世界比較教育学会(WCCES)事務局長のマーク・ブレイ(Mark Bray)教授の基調報告を軸に、この学問の内容と方法の双方について、以下の諸点を中心とした議論の展開が期待される。

第一に、そもそも比較教育学の出発点であり、教育改革のモデルとして借用の対象と見なされてきた先進国の教育に関する研究は依然として価値や妥当性をもつのか、あるいは新しい観点が生まれているのか。

第二に、純粋アカデミックな一般法則探求的な研究とともに、国際的な協力援助のための具体的処方箋提示という途上国研究にまつわる実践的・応用的要請を比較教育学者はどのように受け止めればよいのか。

第三に、インターネット時代の現在、机の前にながらにして相当の情報が入手できるようになる一方、容易にフィールド調査が行いえるようになった状況の中で、広義の文献・資料研究とフィールド調査との比重や位置づけ等を検討し、比較という調査手法の確立について考える。